

を説いて、修行者を退せしめ、常の觀行を棄て、忽ちに他の行法に移り、乍ちに精進を至し、乍ちに懈怠を至さしむ、又禪定を好み、又論談を好む、是くの如く常に非る此れ魔の所爲なり、大般若經の魔事品兩卷之れを持し、之れを安せよ、若し魔便りを得れば即ち能く一切の佛法諸の世間の善を障礙して一向に惡趣に墮在せしむ。問ふ、若し是くの如くの魔事あるの時何んが當に對治すべき。答ふ、四種あり、一には隨順隨轉對治門、二には相逆相違對治門、三には俱行對治門、四には俱非對治門なり、初の對治とは當に一切三世常住の佛界魔界皆是れ法身本有の三密なりと觀すべし、是くの如くの三密互相に涉入して、一味平等なり、魔羅の三密と我が三密と本來不二なり。既に二法無し、豈に障礙有らんや、三密と三密と本來平等にして本不生なるが故に、諸佛衆魔同一法界なり、瑜伽の三密互相に輪圓して、損を離れ、減を離れ、諍無く怨無し、所有の忿怒、即ち是れ諸の（二）教令輪身（三）教令輪身なり、動靜威儀印契に非ること無く、所出の音聲皆是れ眞言なり、所念の意趣悉く是れ禪智なり、所有の隨順可愛の諸相は、亦如來の自性輪身なり、所説の言語總持に非ること無し、行住坐臥盡く是れ印相なり、所思所覺、亦は智亦は定なり、是を密教の順對治の相と名く、第二に相逆相違對治門

（二）教令輪身
剛離化の衆生を濟
度せんが爲に忿
怒形の尊を現じ玉
ふた教令輪身と云
ふ、教令を以て威
壓するが如し。

とは、若は手に印を結で是れを避除すべし、若は陀羅尼を誦して加持して之れを治し心に觀智を作して之れを滅す、觀法を作すこといかん、頌に曰く。

我は是れ持明者なり 魔は即ち破戒の類なり

諸佛菩薩衆 聲聞諸賢聖

善の（二）天龍八部、所持の法を護るに由て

皆悉く我を加護す 暫くも捨離する時無し

何れの時にか其の便りを得て 能く我が眞道を障へん

魔は無明より生ず 我が行は本より佛道なり

行者は光明の如く 魔事は黑暗の如し

明暗の並ばざるが如く 薪火の順せざるに同じ

魔事は本より不生なり 幻の如く夢境の如し

空華の有名に似て 龜毛の無體に均し

暗光明を消せず 妄何ぞ眞道を障へん

是を逆對治と曰ふ。

（二）天龍・乾闥
婆・阿修羅・迦樓
羅・緊那羅・摩睺羅
伽・人・非人。

第三に、俱行對治とは、順逆の二治並べて共に之れを用ゆ、第四に俱非對治とは、頌に曰く、諸法本より不生なり、自性言説を離れたり、清淨にして垢染なし、因業なり、虛空に等し、大日經の頌に曰く、心自性無きが故に、因縁(緣、現本)を遠離せり、業生を解脱して、生虛空に等同なり、又云く、諸趣は唯相名のみあり、佛相も亦復然なりと、佛界諸法本より清淨なれば、常樂我淨是れ眞實なり、我れ及び魔事等畢竟空寂にして所有無く、念無く、虛(虛は恐くは虛の字)無く、著取無く、増無く、減無く、彼此無く、體無く、形無く、相用無く、解無く、障無く、礙無く、自他なし、虛空虛空を礙へずして、實相何を實相を諍はん。

第八に即身成佛行異門とは、凡そ即身に大覺位處を證得するの行、別に略して四種あり、いはゆる(一)深智相應印明行、(二)事觀相應結誦行、唯信作印誦明行、隨於一密至功行なり、第一の行は、内證甚深の智慧皆悉く相應具足して、能く印明行を修行して、即身成佛するが故に、第二は深智の觀慧無しと雖、慇懃に、手に印を結び、口に明を誦して、字印形の三種の中に於て、隨て一事を觀修して、即身成佛するが故に、第三の行は如上の二種の智觀無しと雖、唯深く信解して、印を結び明を誦して自然に頓に

(一)深智相應印明行
(二)事觀相應結誦行
(三)唯信作印誦明行
相勝慧の機の行なり
相劣慧の機の行なり

成佛すべきが故に、第四の行は設ひ餘の二行及び廣智無けれども、唯一義を觀じ、一法を解して、至心修行の故に、即身成佛するが故に、設ひ且また一法の智慧及び餘の二行無けれども、唯信を以て門と爲して、一字形を觀じて成佛し、一印形の三摩耶形を觀じて成佛し、一尊形相の一相を觀じて成佛し、及び餘行無けれども唯だ一明一字を誦して成佛し、並に印契を結び、且また餘の密行無けれども、唯相應すれば必定して即身成佛するが故に、總じて爾か云ふなり。

問ふ、正成佛の一刹那の時に三密相應して成佛すとやせん、はた當さにいかん。答ふ、正成佛の時は、必定三密相應して即身成佛するなり。問ふて曰く、若し三密相應して即身成佛すと言はば、はた當さにいかん、(答ふ正成佛より、はた當にいかん、彼の二行一行等に依て成佛すとは、是れ正成佛の時に非ず、また餘の二行を修する不思議の加持力に由るが故に、忽に餘の二密等を生じして、三密具足して即身成佛するなり。問ふ、何等の經論に分別して即身成佛の義を説くや。答ふ、即身義に説くが如し。)

第九に、所化機人差別門とは、此の所化の機に於て總じて二類あり、一には現身往生、二には順次往生なり、現身門に於て又二の別あり、一には大機の即身成佛、二には小機

の即身成佛、又二に於て各二あり、利鈍別なるが故に、謂く大機の利根は直に法界體性三昧に入て横に法界を觀じて即身成佛す、いはゆる一切衆生は本有の薩埵なり、法爾に普賢大菩提心に應住す、本有の我字は所觀の體、本不生の智は能觀の體なり、能所一體、心一境、靜にして本不生の理を覺て言語道斷し、本不生の理を覺て諸過解脫を得、本不生の理を覺て因業不可得なり、本不生の理を覺て等空不可得なり、能觀緣慮の一心、所觀字相(相一本に)の一體、能所一體にして、空理を證する時、即身成佛す、是を大機横觀の三摩地と名く、大機の鈍根は豎に法界體性三昧觀に入て、(一)本有の五輪の種子を觀ず、此の五字は即ち十五種の金剛三昧なり、一字即ち十五字、十五字即ち一字、一字即ち五字なり、(即五字の下破地獄の軌に)此の字門に於て八門を以て之れを觀ず、一字攝多門、多字攝一門、一字釋多門、多字釋一門、一字成多門、多字成一門、一字破多門、多字破一門なり、順觀旋轉すること十二遍すれば、十二の流轉に於て、字毎に觀察すれば生死の源を盡す、逆觀旋轉すること十二遍すれば、十二の還滅に於て字毎に觀察すれば涅槃の理に至る、理とは本不生なり、十五の金剛三昧に入て、能く理理の本不生を觀じて、能所俱に絶す、我字本不生なるが故に、(二)我字言語不可得なり、言語道斷

(一)五輪の觀は即ち胎藏法の五輪成身觀なり、直往の機所に約すれば、金剛界に約すれば、即ち五相成身觀なり、即ち本有なり、故に無莊嚴の我なり、(二)修善提心即ち修生の智なり、(三)我は成金剛心、我は智光の故に金剛心なり、(四)證金剛身なり、(五)佛身圓滿なり

なるが故に、(一)我字染淨不可得なり、解脫を得るが故に、(二)我字因業不可得なり、無自性を得るが故に、(三)我字等空不可得なり、首尾俱に亡して本心を見る時、即身成佛す、是を漸豎の觀と名く(已上共に)小機利根は心數の別の本尊に就く、且らく觀音の行者に約して之れを釋せば、本有の九重の我字は一切衆生の本有の觀音の種子なり、慚愧不可得の義に依て能く自性清淨妙蓮不染を信じて、蓮華を覺悟して四時に於て間斷せしめず、三密の行を修して開敷蓮華の印に住して、(一)我字の明を誦して慚愧不可得の理に住して本初の覺蓮を證見す、是を小機觀の即身成佛と名く、小機の鈍根は蓮華三昧に入て、(二)我字の四字を觀じて、四時の中に於て是の如くの勝三摩地に於て四種の威儀暫くも放捨せざるべし、此の生に次第に(三)十六大菩薩の位を経て、慚愧清淨の菩提心を發して、薩王愛喜の位を経て、(四)我字の菩提心の義を觀じて四種の位を證し、次に四種の菩提行を修して、寶光幢咲の位を経て、(五)我字の理を證し、次に四種の智慧門を修して、法利因語の位を経て、(六)我字の智を得、次に四種の精進門を修して業護牙拳の位を経て四の羯磨を得、第十六生に於て本有の心蓮を顯す、先づ蓮華三昧を證して、(七)便ち(便、疏一に)方便を轉じて即ち大毘盧遮那佛と成る、觀自在を論ずるが如く餘

(一)薩王愛喜、寶光幢咲、法利因語、業護牙拳の十六大菩薩を言ふ。

尊も亦復是くの如し。問ふ、世間の眞言行者並に道心者の但念の者を見聞するに、未だ必ずしも皆淨土に往生せず、何かなる用心を以てか今度往生の願を遂げん。既に一念十念を以て、往生の親因と説く、心有らん男女何を往生の思を絶たん、答ふ、多くの因縁あり、能く能く當に用心すべし、謂く或は眞言行を修し、或は但念佛を至し他人の見聞を思て佛陀の知見を信せず、是の行は順因に非ず、或は他人の恭敬を求めて後世の苦行を作す、亦順因に非ず、或は名利を以て法華經等を讀誦する、亦順因に非ず、或は名聞の持戒亦順因に非ず、或は自是非他亦た順因に非ず、或る學人の云く、十念の順因は別時意趣なりと、當に知るべし、方等經を誘するに同じ、亦順因に非ず、或は顯密の行業自を執し、他を非する者亦順因にあらず、或は彌陀彌勒の行者、互に是非を爲す、是れ即ち地獄の業因なり、二語を論せし菩薩の如し、若し是くの如くの用心を知らば誰れ人か往生せざらん、大師の云く、迷悟己れに在り、執無くして到ると文第十に、發起問答決疑門とは、問ふ、五輪門に依る機に幾く種か有る。答ふ、二種の機あり、一には上根上智、即身成佛を期す、二には但信行淺、順次往生を期す、此の行者に就て亦多あり、正しくは密嚴淨土に往生し、兼ては十方淨土を期するあり。問ふ、何

(二)菩薩
清辨等。護法。

んが故に大日を念誦して十方淨土の親因とするや。答ふ、此の五字の眞言は十方諸佛の總呪、三世薩埵の肝心なり、故に此の眞言を持誦すれば、思に隨て十方淨土乃至彌勒の所及び阿修羅窟等に往生することを得、同じく九字の眞言行者又阿彌不佛の名號に於て、更に淺略の思を作すことなかれ、若し眞言門に入る時は、諸の言語みな是れ眞言なり、何に況んや阿彌不をや、此の所立は三句の法門を以て諸の行業を攝す、且らく三部を擧げて攝して一切の尊を知らしめば、阿彌不佛初の一字門は菩提爲因、次の二字は大悲爲根、後の一字は方便爲究竟なり、阿彌不佛初の字を以て因と爲し、次の二字を根となし、後の一字を究竟と爲す、又阿彌不三句分別前きの如し、總じて諸佛菩薩金剛天等みな本種子あり、其の字四轉を具するが故に、亦三句を具す、無量の三句みな是れ順次往生の親因なり、問ふ、諸教に亦三業の修善を以て往生の業と爲す、今の宗の三密具足其の義如何。

法佛の三密は甚だ深細なり 顯教の妙覺も知る所に非ず
智身の六大は極めて玄廣なり 密宗の圓智のみ獨り能く證す
一道無爲の寂光の佛 驚怖し希哉して言語を斷つ

三自本覺の帝珠の尊 恭敬し證を棄て眞覺を求む
 報佛の如來は默して答へず 變化の善逝は秘して談せず
 補處の等覺は其の境に迷ひ 飲光の受職彼の域を隔つ
 形體の色質即ち身密なれば 動寂の威儀是れ密印なり
 音韻聲響みな語密なれば 麤細の言語悉く眞言なり
 染淨の心識開て(開一本皆に作る)心密なれば 迷悟の分別智に非ることなし
 說默情意亦意密なれば 輪圓具足して法界に遍す
 事事理理本より不二なれば 邪正の觀念定に非ることなし
 色色心心自ら異なることなければ 圓融涉入して虛空に等し
 密行は任(任一本に任に作る)に見聞せしむることなかれ 秘法は妄りに傳受せしむることなかれ
 淺智は顯に濫して福を失ふが故に 劣慧は均しく争て罪を獲るが故に
 根無れば篋を泉の底に秘す 信せざれば定で實際を摧くが故に
 機に非れば談を喉の内に閉づ 疑を生ずるは必ず無間に墮するが故に

嬰兒に莫耶を惜しむに非ず 唯妄想の是れ生を害せんことを恐る
 顯人に瑜伽を秘するに非ず 偏に非す不信の只だ災を招かんことを
 輕んずることなかれ疎んずることなかれ三部の寶 重んずべし崇ふべし三密の珍
 能歸は深く心蓮の海に入り 大信は玄かに覺月の空を仰ぐ。

國譯五輪九字明秘密釋一卷終

右書の中多く灌頂の文を載す、未灌頂の者は師に受けて開くべし、中に就て五藏の秘義是れ大事なり、能く能く受學して之れを修せよ。

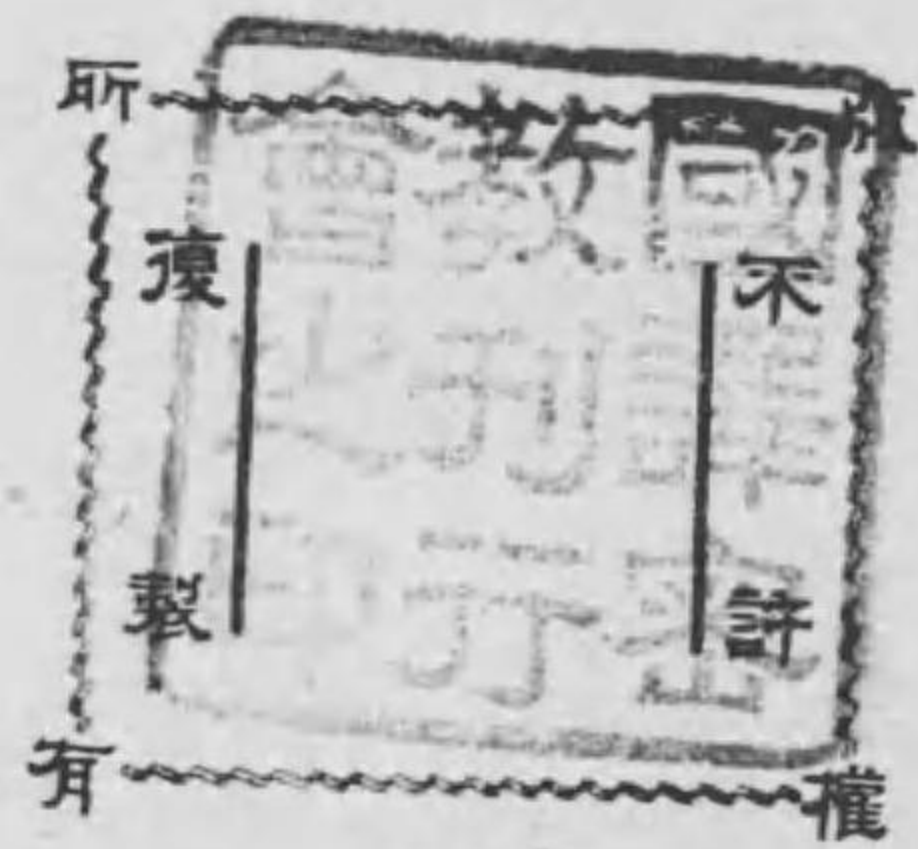
抑も此の秘釋を記して後(一)三摩地に入る忽然化現して寶生房の云く、崑崙一度崩れて金石即ち一物なり、毘彌兩觀凡聖無二なり、吾れは是れ(二)金色世界の古衆、汝は亦密嚴淨土の新人なり、若し此の瞻蔔林に入る時は誰れ人か異熏あらんや、終に此の説者幻の如くして見えす此に於て覺へずして涙落ち、慚愧熾盛なり、忽に密嚴の有相を見て、生死の絶んことを知るのみ。

(一)三摩地云云
 孔字觀に入る。
 (二)金色世界
 樂世界なり。極

大正九年十一月五日印刷
 大正九年十一月十日發行

國譯密教論釋第壹奧付

【非賣品】



禁 轉 載

編 纂 者 塚 本 賢 曉

東京府北豊島郡高田町字雜司ヶ谷三百十二番地

發 行 者 伊 豆 宥 法

東京市牛込區若宮町三十五番地

印 刷 者 川 邊 多 門

東京市本郷區湯島三組町八十一番地

印 刷 所 川 邊 活 版 所

東京市本郷區湯島三組町八十一番地

發 行 所 東京市牛込區若宮町三五
 振替東京五〇一八七 國譯密教刊行會

353
283

終